

伊庭想太郎編(3)

伊庭八郎

箱根の戦いで左腕失う

騒然たる幕末維新の世を駆け抜けて、伊庭想太郎の長兄八郎は、まるで流星のような一閃の光芒を放つ。

「容貌は清秀なる中に和気ありて一個の美丈夫たり」 「詩をも歌をも作り、最も軍記物を好み水滸伝の如きは大概諳んじ居たり」 = 『香亭遺文』

八郎を評して、こう記しているのは同じ道場の門弟で、八郎の親友だった幕臣中根淑である。

開国か、攘夷か。激しく動揺する幕府にあって、將軍警護の遊撃隊に編入された八郎は、その短い生涯で3度、銃弾を身に受けている。

最初の被弾は、慶応4年(1868)正月の鳥羽伏見の戦いだった。胸部あるいは腹部に受けたといわれる。幸い、鎧などの防具に守られて、強い打撲ですんだらしい。

2度目は同年5月の箱根・山崎の戦いだ。江戸に向かう新政府軍と小田原藩兵を相手に激しい戦闘となった。

その際、八郎は腰に被弾して倒れた。「(そこを敵兵が)切り掛け、其の左腕を断ちたり。依って、(八郎は)立ちざまに其の敵を斬り倒し、なお一人を斬り伏せ…」 = 同

すさまじい情景である。左腕を失った八郎が榎本武揚軍の病院船に収容されたとき、「ヤリソクナイマシタ」と平然と語り、榎本を驚かせたという逸話も伝えられている。

最期に服毒説、流弾説も

榎本の艦船が蝦夷地へ向けて品川沖を出航したのは、それから3か月後だ。隻腕の八郎が中根淑らとともに乗り込んだ美加保丸は、下総沖で遭難・座礁するが、それであきらめる八郎ではない。苦勞して、横浜からイギリス船に便乗、箱館の榎本軍に加わった。

遊撃隊長として奮戦した八郎が3度目の被弾をしたのは、明治2年(1869)4月だった。すでに劣勢の木古内での戦闘中、「肩から腹へかけて鉄砲玉にて撃ち抜かれた」と、その模様を証言しているのは、八郎の従者、荒井鎌吉である。



箱館戦争「五稜郭より発砲応援之図」
(小杉雅之進作、東京農大図書館蔵)

隻腕の美剣士
箱館で落命

上野広小路の料理屋「鳥八十」の料理人だった鎌吉は、ひいきにしてくれた八郎に心酔、ここまで付き従ってきた。後年、旧幕府史談会で見聞を語っており、詳細は後述する。

箱館の病院に収容された八郎も、今度は致命傷だった。その最期を看取った鎌吉は語る。「何分気性の勝った方ですから、大砲の玉が響くと、死にかかって居るに飛び上がる勇氣ですゆえ、お医者様が麻薬で精神を落ち着かせてヤット御死去になった程です」 = 「旧幕府」第3巻第8号

これに異説もある。自らの死を覚悟していた榎本が、八郎に致死量のモルヒネをすすめたという、いわば服毒説だ。また、流弾が当たったという説もある。これらの真否を確かめるすべはない。

明治2年5月12日、八郎死去。享年26歳。

中根 淑 (きよし)(1839-1913)



幕臣。維新後、沼津兵学校教授。漢文学者。陸軍参謀局で『兵要日本地理小誌』編纂。『日本文典』など著書多数。号・香亭。